

負の遺産の類型化と「共通の当事者性」に関する試論 —カンボジアのローカルな慰霊の場の事例から—

牧 野 冬 生*

A Discussion on Typology and “Individuals’ Sense of Sharing Experiences” of Negative Heritage: -Local Memorial Sites in Cambodia-

Fuyuki MAKINO*

Abstract

Cambodia, with its market economy flourishing, has entered a period of rapid economic growth. People’s lives there have become more stable. Amidst this stability and growth, however, the following issue has emerged: how to pass on the negative memories of the country’s long civil war and the Khmer Rouge’s massacre of fellow countrymen. In Cambodia, how are people internalizing the memory of this long civil war (including the Khmer Rouge era) , creating new relationships with others, and greeting the current economic development ?

In this paper, I present three critical preconditions in analyzing the negative heritage, which has four types. Having done so, I then present the idea of “individuals’ shared sense of being affected by or involved in the events in question,” which is the focus in local memorial spaces and overcomes the binary opposition between victims and perpetrators.

I carried out my case study in a total of four places in Cambodia’s Prey Veng, Svay Rieng, and provinces. The local negative heritage of farming villages has no clear symbols indicating that “something happened here.” However, the negative heritage in such places has been absorbed into the small, tightly knit communities, where Buddhist rituals play a role of linking such memories and places and developing separate stories that carry the negative heritage. “Individuals’ shared a sense of being affected by or involved in the events in question” has been nourished through residents’ word of mouth and religious functions.

1. はじめに

2014年8月7日にクメール・ルージュ裁判でひとつの重要な判決が下された。カンボジア特別法廷は、元クメール・ルージュ最高幹部のヌ

オン・チアとキュー・サムファンに、人道に対する罪で終身刑を宣告した。この判決は、同2人に対する裁判の第2事案・第1事件であり、約4千人の被害者が裁判に参加した。現在は、

*人文学部 住空間デザイン学科

第2事件の審理が続いている。第2事件では、大量虐殺を含む複数の容疑が審理されることになるが、高官の証人喚問拒否や政治的介入の疑惑もあり審理は進んでいない。40年前の大量虐殺とそれに続く内戦の全容が未だ解明されないまま、住民は日々の生活を再構築しながら負の遺産と共に歩んできた。

カンボジアでは、クメール・ルージュ時代を含む長期の内戦の記憶をどのように内面化し、国家を復興させて人々と新しい関係を作り、現在の経済発展を迎えているのか。カンボジアにおける農村やコミュニティの人的ネットワーク、その核である自己と他者の関係はどのように再構築されたのであろうか。負の遺産に関する教育環境は、政府やNGO・NPO等の活動により改善しているが、体系的な歴史教育には程遠い。しかし、一部の公的な慰霊祭とは別に、農村では様々な仏教儀礼の中で、負の歴史は村落の個別的情報として継承されている。

本稿では、まず負の遺産を分析する上で重要な3つの前提条件と負の遺産の分類法について解説する。その上で、ローカルな慰霊空間に生起する、加害者と被害者という二項対立を抜く「共通の当事者性」の特性と、それを生み出す場の構成要素を提示する。

研究方法は、文献調査とエスノグラフィーの手法、インタビュー調査、及び空間調査である。ケーススタディでは、カンボジアのプレイベン州、スバイリエン州にある4ヶ所の負の遺産を対象とする。本稿の構成は以下の通りである。2節では研究方法について述べる。3節と4節では負の遺産を研究する上で考慮すべき3つの前提条件について解説する。5節では、負の遺産の類型化を行い、表象の主体として「公的」「集団」「個人」「外部」の4類型について説明する。6節では、ケーススタディを実施した4ヶ所について、具体的な負の遺産の事例からその

類型と空間の特徴について詳述する。7節では結論部として「共通の当事者性」の特性と、それを生み出す場の構成要素を提示する。8節では本稿のまとめを行う。

2. 研究方法

研究方法は、負の遺産に関する空間調査、エスノグラフィーの手法を用いたインタビュー調査と参与観察である。クメール・ルージュは1975年にプノンペンに侵攻した後、全市民を都市から追放し、国道沿いでは多くの住民が虐殺された。本研究では、国道1号線沿いに位置するプレイベン州とスバイリエン州の小規模なキリング・フィールドをケーススタディとして選択した。研究対象地域は、プレイベン州の2ヶ所、スバイリエン州の2ヶ所の合計4ヶ所である。

インフォーマントは、ローカルな負の遺産が位置する村の住民、僧侶、アチャー¹、ドンチー²である。キー・インフォーマントの選出は有意選出法(judgement sampling)による。負の遺産の調査項目は、外観、内観、装飾などの物理的事項に加えて、負の遺産の歴史、過去から現在までの使われ方、宗教儀礼、儀礼プロセス、参加者同士の関係についてである。

クメール・ルージュの大量虐殺に関する既存研究としては、欧米の研究機関によって多くの証言や資料が収集されてきた³。イエール大学カンボジア・ジェノサイド・プログラム等による膨大なインタビュー資料は重要な一次資料であるが、基本的に虐殺に関わっていない他国の研究者に対して語ったものであり、視点はカンボジアの住民へ向かっていただけではない⁴。また、地方の農村に3000ヶ所以上と言われる小規模なキリング・フィールドは、公にされずに断絶に向かっている。農村における個別のローカルな負の遺産がどのように取り扱われ、

その中で負の記憶がどのように継承されているかについての研究は未だ限られている。

現在、負の記憶の継承に関する状況が変化してきている。現地 NGO によるイベント“Women's Hearing with the Young Generation 2015”では、女性だけでなく男性も含めて、クメール・ルージュ時代に自ら経験した虐待を同国の若い世代に対して語る新たな姿がある。それは、国連、世界銀行、NGO 等が支援してきた経済復興政策が実を結び、カンボジアが高度経済成長の前段階に入ったこととも関係している。本研究は、カンボジア人同士の「負の記憶の継承と内面化」に関わるものであり、現在の課題としての「負の遺産の取扱い」という新たな領域を包含する。本研究で取り扱う農村におけるローカルな負の遺産は、こうした時代の中で初めて調査が可能となった。

3. 「負の遺産」の研究に関する3つの前提条件

最初に、「負の遺産」を調査する上で考慮しておかなくてはならない3つの前提条件を確認する。

3-1. 「忘れないという感情」と「伝えたいという欲求」

負の遺産を見ていくときに重要な視点として、相反するふたつの感情の動きを把握しておく必要がある。ひとつ目は「忘れないという感情」である。過去のつらい記憶は忘れないという思いは、誰もがもつ心の動きである。

2014年に下されたヌオン・チアとキュー・サムファンに対する判決は、大量虐殺の原因を特別法廷の場で最高幹部の数人に限定し、それによってカンボジア政府は国際社会と折り合いをつけた。虐殺に直接かかわった幹部や指揮官クラスの被疑者を特定せず、過去は振り返らないという政府の方針を追認して、この判決は「忘

れないという感情」を後押ししている。この感情が、基本的には大量虐殺に関連した様々な情報を「廃棄する・教えない・報道しない」ことに繋がっていく。

クメール・ルージュ政権が崩壊して38年が経過し当事者の高齢化が進む中で、今まで語らなかった当事者が若年世代の間との記憶の断絶を危惧するようになっている。これは、虐殺の事実を「保存する・再現する・記録する」という方向性で、歴史を後世の人々に伝えることに意義を見出し「伝えたいという欲求」を後押ししている。

一方、ケーススタディで詳述する負の遺産の事例からは、負の遺産の「破棄」又は「保存」という二項対立ではなく、人々は日々の暮らしの中でこの両方の感情を頻繁に行き来してきたという現実が見えてくる。

3-2. 負の遺産の「表象の主体」は誰か

次に、負の遺産の表象の主体について考える必要がある。クメール・ルージュの大量虐殺や内戦の出来事を、誰が主体として表現しようとしているのか。ヌオン・チアへのインタビューによって、加害者側からの視点を描いたドキュメンタリー映画「エネミー・オブ・ザ・ピープル」では、内戦の被害者であったカンボジア人自身（監督）が表象の主体である。そこでは、当時は幼い少年であったとはいえ、分別可能な時期に経験したクメール・ルージュ政権時代を、彼自身がどのように促えているのかが表現されている。

キリング・フィールドで毎年開かれている犠牲者の慰霊祭は公的な行事であり、国家や行政が表象の主体である。さらに、加害者と被害者でもない国際 NGO が作った慰霊碑は、国際社会や特定の第三者団体が主体として表現している負の遺産である。また、負の遺産の表象は異

なる価値観を持つ複数のアクターが同時に主体となることも多い。

3-3. 負の歴史の研究の相対化

負の遺産の研究は、誰に対して何のためにするのかを明らかにしておく必要がある。負の歴史の研究自体の相対化の問題である。例えば、アカデミックな研究の前提としては、「過去の虐殺の出来事を遺産として後世の人々に残していくことは、重要な研究上の意義がある」という共通認識がある。また、それらがカンボジア社会にとっても後世まで残されるべきであるという意識も研究者の間では共通している。

一方、負の歴史を研究することは、ある時点で時間を切り取り歴史として保存し、その成果を将来につなげていくという博物館的な機能を持っている。こうした視点は(3-1)で触れた「保存する・再現する・記録する」という方向に偏りがちである。本来カンボジア社会を中心に考えるべき負の遺産の研究が、国際社会や西洋中心のアカデミズムという枠組みによって、一方的な言説の押しつけとなってしまう。「廃棄する・教えない・報道しない」ことで、カンボジアが長期間かけて社会生活を再構築してきた現実的側面も十分に考慮する必要がある。

4. カンボジア社会と3つの前提条件

負の記憶に対する両義性、つまり「忘れたいという感情」と「伝えたいという欲求」の発露の場では、加害者と被害者が隣接して長期間住んできたという事実を直視しなければならない。カンボジアでは誰が加害者なのか直接は認識できない中、内戦後の混乱期から現在までその日を生き抜くために、他者と隣接しながら暮らす、過去のことはお互い問わないことが必要であった。負の遺産に関する事柄については、住民たちはそれぞれの時間、場所、社会的コンテクス

トの中で、「破棄」と「保存」という二つの感情と共に生活していた。

負の遺産の「表象の主体」を考える際にも、コミュニティの中に加害者と被害者が共存しているということを考慮しなくてはならない。農村のローカルな慰霊の場は、被害者側が表象の主体であるというより、むしろ加害者と被害者が共存しているコミュニティ自体が主体である。また負の遺産の背景にある出来事に関して、知の引継ぎ（虐殺等の事実の次世代への伝達）が為されている点にも着目すべきである。被害者が当時の出来事を表現することはあるが、加害者が主体的に表現していくことはカンボジアの社会状況としてはありえない。村落にクメール・ルージュの加害者が確かにどこかにいるという共通認識の中で、コミュニティが主体となった負の表象が存在しているということが、カンボジアの特殊性である。

負の歴史の研究自体の相対化に関しては、本研究と関心領域を共にする調査が、カンボジア人研究者によって継続される必要がある。クメール・ルージュ政権の時代を生きた当事者の具体的な記憶を引き継いでいる現地研究者の視点は、研究の相対化にとっては極めて重要である。複眼的な視点を取り入れることで、加害者と被害者が共存する集団としての追憶のプロセスにはどのような形がありえるのかということにも客観的に言及することができる。

5. 負の遺産の類型

カンボジアの負の遺産は、「公的」「集団」「個人」「外部」の4類型に分けられる。負の遺産の表象がすべてこの類型に当てはまるわけではなく、実際には重複しながら作用していることにも留意する。

表1：負の遺産の類型（筆者作成）

類型	主体	公共性	機能	感情	特徴	事例
公的	国・行政	高	記録・保存		対外的 観光的	S21 キリング・フィールド
集団	仏教・生活 コミュニティ	中	破棄・忘却 ⇔記憶	両義的	集団的 儀礼的	ストウパ、慰霊碑 日常空間
個人	家族・親族	低	破棄・忘却 ⇔記憶	両義的	個人的 内面的	家族や親族の墓 別離した場所
外部	NGO・ NPO・国際 機関	高	記録・保存・教育		外在的 中立的	慰霊碑 教育施設

5-1. 公的（国家・行政）

「公的」とは、国家や行政組織が主体として「記憶と保存」を明示的に行っている施設である。誰がこの虐殺の主導者であり責任を持つべきなのかについて、観光客や国際社会に対して表現している。カンボジアではS21やチュンエク村の整備されたキリング・フィールドがそれにあたる。公共度は高く、かつて多くの住民が行方不明になった親族を探すために訪れていた施設でもある。こうした場所は、現在は負の観光（ダークツーリズム）の重要な場所とされている。多様な言語で観光ツアーが組まれ、公的機関がどのようにクメール・ルージュ政権時代の歴史を認識し、表象しているのかがよく分かる。

5-2. 集団（仏教・生活コミュニティ）

「集団」とは、寺院コミュニティ、農作業の相互扶助コミュニティ、小規模の生活集団などが主体として表象している負の遺産である。多くの場合、虐殺などの負の出来事の詳しい事実とは不可視化され、観光とは切り離された日常生活（個別の仏教行事や生活儀礼）に埋め込まれ

ている。具体的には、寺院のストウパ、コミュニティ内の小さな慰霊碑、或いは何も示されない田畑など様々な形態がある。特徴として、クメール・ルージュ時代の被害者の話、拷問、処刑などに関する説明は一切見られない。その村落で暮らしている住民だけが、その場所が持つ意味を知っている。集団における負の遺産の扱いは、日常生活の中では不可視とされつつ仏教儀礼の時に断片的に記憶が再起されるため、住民にとっては両義的な感情を抱える場所となる。公共度は、ある集団間のみで共有しているため中程度である。負の遺産の記憶を伝達する行為は仏教行事の中に埋め込まれているが、体験的世代の高齢化などから実際には「集団」としての負の遺産は徐々に破棄と忘却に向かっている。

5-3. 個人（家族・親族）

「個人」とは、家族や親族の墓、親族が殺された現場、別離した場所などがそれにあたる。道路、田畑など様々な場所に、私的な負の遺産は存在している。「集団」の場合と同様に、そこには何も説明もないが、親しい仲間同士はこ

こで何があったのかを知っている。インタビューしたある住民が、「ここに来ると、僕は父親のこと、母親のこと、兄のことを思い出す」と話す具体的な場所がある。そうした場所は、他人にはただの道路や広場であっても、当事者にとっては負の出来事が認識される重要な場所である。負の遺産に対する感情は、集団と同様に両義的である。主に家族や親しい親族間の共有であるため、公共度は低い。世代を経るごとに、こうした私的な負の遺産は忘却と破棄に向かうが、個別で家族的な親密性の中では記憶として留めたいという人々の願いは強い。

5-4. 外部（NGO・NPO・国際機関）

「外部」とは、国際 NGO や第三者機関によって作られた慰霊碑や教育施設などである。こうした犠牲者の慰霊碑は、クメール・ルージュ時代に脱出できた人々の寄付金や NGO・NPO の募金によるものが多い。外部者による介入、つまり NGO 等の第三者機関が建立した慰霊碑は、カンボジア社会の内部で作られたものとは大きく異なり、虐殺の事実を克明に表現している。慰霊碑には、被害者の骨が見える形で置かれ、集会所には、クメール・ルージュ時代に人々がどのように連行され、拷問を受けて殺されたのかという壁画やレリーフが描かれる。負の遺産の扱いとしては公的なものと同様に記憶と保存の要素が強く、教育的要素が付加されることで公共性が高くなる。慰霊ストウパと隣接して建設されるこうした施設はカンボジア社会の中からは出てこないものであり、客観的な事実の提示と外部からの新たな意味の付与が見られる。

6. ケーススタディ

1970年から1975年までの内戦の死者は40万人以上と言われている。クメール・ルージュ軍は1975年にプノンペンに侵攻し、プノンペンに居

住する全市民を4月17日から18日にかけて一夜にして都市から追放した。その数は150万人とも200万人と言われており、都市住民は強制的に農村に向かわされた。住民たちは、国道1号線を通してスバイリエン方面、国道2号線を通してタケオ方面、国道5号線でウドンを通してバットバン方面、そして国道6号線を通してシェムリアップ方面と各地に送られた。

ケーススタディの調査地域は、国道1号線沿いのプレイベン州とスバイリエン州にある以下の4ヶ所である。

1. ライス・フィールド（プレイベン州）
2. パーム・ツリー（プレイベン州）
3. Krol Ko Pagoda（スバイリエン州）
4. Beong Rai Pagoda（スバイリエン州）

研究方法は、参与観察、インタビュー調査、及び空間調査である。インフォーマントは、4ヶ所の村の住民、僧侶、アチャー、ドンチーである。調査項目は、慰霊の場の外観、内観等と同時に、建立に関わる歴史、使われ方、農村個別の儀礼、仏教儀礼、儀礼のプロセス、参加者の関係等であり、半構造的インタビューを実施した。

6-1. 「不可視」の場

プレイベン州とスバイリエン州の境界に位置する Ekreach Pagoda は18世紀前半に建設された寺院である。各村に隣接する寺院は、広大な土地と多くの人々を収容できる大規模な建物を有しているため、戦時には接収されて軍隊の指揮下に置かれることが多かった。Ekreach Pagoda も例外ではない。1970年代以降は北ヴェトナム軍との争いに巻き込まれ、1975年から1979年のクメール・ルージュ政権時代には仏教信仰が禁止されて、寺院の機能は完全に破壊さ

れた。クメール・ルージュ軍によって、Ekreach Pagoda は地方部隊の司令部、住居、刑務所、処刑の場、また食事の場として利用され、その後1980年に再建されて、現在は20名ほどの僧侶がいる。当時の状況を知るアチャー（カンボジアにおける僧侶と住民を結ぶ在家修行者）によると、スパイリエン州からは多くの住民が Ekreach Pagoda に連行されて、寺院の近くで処刑されて埋められた。その後掘り返された遺骨は一旦寺院内の講堂に集められた後、それぞれの出身地の寺院に運ばれた。

①ライス・フィールド（プレイベン州）

住民たちが共有する祈りの場としてのライス・フィールド（写真1）は、寺院 Ekreach Pagoda に隣接している。ここには、当時の虐殺や遺骨が埋められていた状況を示すモニュメントや看板による説明は一切ない。虐殺などの負の出来事を確認できるものは、視覚的には何ひとつ存在せず、水田のみが広がっている。しかし、この場所が単なるライス・フィールドではなく、クメール・ルージュ政権時代には処刑前の待機場所であり、処刑の場であり、そして多くの住民が埋められた場所であったことは住



写真1：ライス・フィールド
（筆者撮影、A-Kreach Village, Preychho commue, Prey Veng Province）

民の間で語り継がれている。

住民は、クメール・ルージュ軍が子どもや赤ちゃんを打ち付けて殺したという木についても話してくれた。よく見ると木の幹が今も一部周辺と違うことが見てとれるが、その痕跡は住民から指摘されない限り気づくことはできない。遺骨を掘り返した当時は強い異臭を放っており、遺体の多くは白骨化していなかったと住民は話した。当時はすべての僧侶が還俗していたため、遺骨を掘り返した後も法要儀礼はすぐにできなかったという。しかし、住民の要望に応える形で、現在はライス・フィールドには僧侶が定期的に訪れて経をあげている。

住民は、この場をどのように扱い、認識しているのだろうか。この場所は、通常は水田として利用され、稲が収穫される。日常生活の中では、この場所が処刑の場であったことはまるで忘れ去られたかのようである。しかし、住民は仏教の年中行事であるプチュンバン、カタンやクメール正月の時は、ライス・フィールドにお供え物をしている。また、ある高齢の女性は、仏教行事のときには、このライス・フィールドと Ekreach Pagoda には必ずお参りをしていると話した。非日常の仏教儀礼の中では、日常に埋もれていた一見なにもない場所が祈りの空間となり、負の出来事が繰り返し想起されることによって、住民同士で負の記憶が継承されている。

②パーム・ツリー（プレイベン州）

ライス・フィールドに程近いパーム・ツリー周辺も、多くの遺体が埋められていた小規模なキリング・フィールドである（写真2）。この場所も、虐殺の事実を示すモニュメントや看板は一切ない。数百メートル先に学校が見えるが、そこは処刑の直前に住民が集められた場所であった。服を脱がされた遺体も多く、現在も多

くの犠牲者の服が学校の中に保管されている。連行されてきた住民は、警察、知識人、資本家、農民、さらに女性、男性、子供といったように、いくつかのグループに細分化されて別々に処刑され、グループごとに大きな穴にまとめて埋められた。その中にはカンボジア人だけでなくベトナム人、欧米人、華僑、その他の外国人もいた。掘り返された遺骨は、先程と同様に一旦 Ekreach Pagoda に集められて講堂の中に積みまれ、それぞれの故郷の寺院に送られた。その多くは、スバイリエン州の寺院であった。クメール・ルージュ軍は処刑者のリストを詳細に管理していた。反政府勢力とみなされた人々の捕縛、収監、連行、処刑の各過程における管理方法については、チュンエク村のキリング・フィールドの資料が詳しい。処刑された住民のリストが存在するため、遺骨の送り先はある程度正確に

割り出せた。Ekreach Pagoda のアチャーや僧侶によると、バットンバンにも遺骨が送られたとのことである。

現在も稲作の作業中に遺骨、歯、服が見つかることがある。しかし、住民によると、そのまま地中に埋めてしまう事が多く、日常に時々顔を出す虐殺の痕跡は、その場その時の、個人的な負の記憶への対処を要求する。

一見日常に埋もれた負の記憶の場所は、年間の仏教行事を通して住民の記憶が再帰し共有されることで初めて可視化され、意味が付与された場に変容する。毎年繰り返される仏教行事を経て、個人的な語りの内容は徐々に変化しながら世代を超えて住民に共有された集団的な記憶となる。その意味で、この場所は個人の記憶に基づく個人的な場から集団的な記憶が付与された共有空間となっている。

その一方、外部への明示的要素は全くないため、外部の者にとっては村落というコミュニティの中に埋もれた不可視の場でもある。こうした、あるコミュニティの中に限定されながら世代を超えて記憶を伝達する役割を果たす空間は、公的な慰霊空間と大きく異なり負の記憶の内面化を促す重要な要素である。

6-1. 仏塔（ストゥーパ）

カンボジアの多くの寺院には、クメール・ルージュ政権時代に被害にあった人々の骨が納められた仏塔（ストゥーパ）がある。これは、クメール・ルージュ政権によって宗教が禁止され僧侶が還俗された結果、寺院施設がクメール・ルージュ軍の拠点として利用されるようになったことと関係している。寺院の大伽藍等の大規模な建物は住民の監獄となり、寺院の周辺は虐殺の舞台となった。人物を特定できなかった被害者の骨は、クメール・ルージュ政権の終焉後に供養されて寺院内部の仏塔に収められる



写真2：ヤシの木周辺
(筆者撮影、A-Kreach Village, Preychho commue, Prey Veng Province)

ことになった。

① Krol Ko Pagoda の仏塔（スバイリエン州）

スバイリエン州に Krol Ko 村の菩提寺である Krol Ko Pagoda がある。Krol Ko Pagoda には、村民が寄進した多くの仏塔が建立されている。1981年に、Krol Ko 村の村民と特定された被害者の遺骨が Ekreach Pagoda から Krol Ko Pagoda に移された。本堂の中には長い間遺骨が積み上げられていたが、二人の住民の寄進によって、被害者の遺骨をまとめて納める仏塔が建立された（写真3）。

この仏塔は、カンボジアの仏塔としてはごく一般的な形式をしており、基壇は約4m×8mである。ナーガ⁵を載せた柵で囲まれている。



写真3：Krol Ko Pagoda のストウーパの前で祈りをささげるドンチー

（筆者撮影、寺院：Krol Ko Pagoda 村落：Krol Ko Village, Svay Chhom commue, Svay Rieng Province）

下段部は正方形で、上段部には円錐状の塔が配置されている。下段部の前面に扉がついており、その上に建立者の名前が明記されている（写真4）。前面の扉を開けて、内部に遺骨を安置することができる。ガラスの扉の奥には多くの被害者の遺骨が積まれている。仏塔には寄進者の名前が明記されているのみで、ポル・ポト時代の被害者といった説明は一切ない。仏塔は、Krol Ko Pagoda のドンチーと僧侶によって管理されており、仏教儀礼の際には住民が共同で慰霊の儀礼を行う。

② Beong Rai Pagoda の仏塔（スバイリエン州）

スバイリエン州の Beong Rai 村の菩提寺として、Beong Rai Pagoda がある。クメール・ルージュ政権時代には破壊されたり焼却された



写真4：Krol Ko Pagoda ストウーパ扉部分
（筆者撮影、寺院：Krol Ko Pagoda 村落：Krol Ko Village, Svay Chhom commue, Svay Rieng Province）



写真5：Beong Rai Pagoda ストゥーパ全景
(寺院：Beong Rai Pagoda 村落：Beong Rai Village, Svay Rieng Province)

寺院も多かったが、この寺院はクメール・ルー
ジュ軍の拠点となり、住民の監獄としての利用
と同時に、兵士の営繕、住居として使用されて
いた。Beong Rai Pagoda の僧侶によると、
Krol Ko Pagoda と同様にこの寺院でも、カン
ボジア各地で処刑された住民や、この寺院周辺
で処刑された人々の遺骨が本堂に集められた。
ここでは、アチャーと高位の僧侶によって仏塔
が建立された（写真5）。

この仏塔も正方形の下段部を持ち、上段部に
アンコールワットの中央祠堂を模した円錐状の
塔が配置されている。仏塔には建立年代が記さ
れておらず、僧侶へのインタビューでも判明し
なかった。また、Krol Ko Pagoda の仏塔と同
様にポル・ポト時代の虐殺に関しては何も明記
されていなかった。仏塔の内部には、遺骨が頭
部や大腿骨などに分けて保管され（写真6）、



写真6：Beong Rai Pagoda ストゥーパ扉部分
(寺院：Beong Rai Pagoda 村落：Beong Rai Village, Svay Rieng Province)

定期的な仏教行事の際には僧侶により供養が行
われる。

各寺院の仏塔の中に収められた遺骨は、僧侶、
アチャー、ドンチーによって手入れされ、安置
されている。こうした寺院の仏塔に共通してい
ることは、その寺院を菩提寺とする村の住民は、
仏塔が意味するもの、つまり仏塔がクメール・
ルージュ政権時代に虐殺された被害者のために
建立されたものであることを知っている。しか
し、外部の者にはそれが明示されていない。建
立者の名前しか書いていない仏塔の意味を読み
取るには、村民としてのローカルな視点が必要
となる。

7. 結論

本稿では、負の遺産を分析する上で重要な3
つの前提条件と負の遺産の4分類を提示した。
ケーススタディでは、両義的な感情の発露の場
として農村の慰霊空間の特性を記述しようと試
みた。

ここでは結論として、加害者と被害者という
二項対立を抜け出した、負の出来事に対する「共
通の当事者性」という新たな概念について、以
下の3つの特性を仮説として提示しておきたい。

(1) 負の遺産に対峙したときに生じる相反するふたつの感情(「忘れないという感情」と「伝えたいという欲求」)は、負の遺産に対して「破棄」又は「保存」という二項対立を要求しない。住民は日々の暮らしの中で両方の感情を同時に保持しながら負の記憶の忘却と再帰を頻繁に繰り返している。このように、ふたつの感情を住民が長期にわたって保ちながら、負の遺産と恒常的に寄り沿っていること。

(2) 農村の負の遺産の「表象の主体」は、加害者と被害者が共存しているコミュニティ自体であり、住民の共有の存在である。対象としたローカルな負の遺産の表象の主体は「集団」に分類されるものであるが、現実的には、「集団」と「個人」は重複しながら作用している。このように、負の遺産の多様なストーリーを、住民が「集団的なもの」と「個人的なもの」の両面から保持していること。

(3) 負の遺産について、地元住民は俯瞰した視点から第三者的に語っている。クメール・ルージュ政権時代について語る住民の声は、長い時間を経て日常生活の中に溶け込み内面化したかゆえの抽象性と具象性を併せ持っている。このように、住民が負の遺産を外側から見る第三者的な視点を保持していること。

次に、「共通の当事者性」を生み出すローカルな負の遺産の構成要素を、以下の4点にまとめる。

(1) 負の遺産では、その場所が意味する事柄、つまり誰によって何があったかを語る明示的な表象が存在しない点

(2) 負の遺産が、家族的な親密性をもつコミュニティの中で、親や大人からの伝聞により伝えられる個別のストーリーを持つ点

(3) 負の遺産が年毎の仏教的儀礼を契機として個人の負の記憶と結びつき、具体的な儀礼実践を通してコミュニティの中で集団的な記憶を

形成してきた点

(4) 日常的には不可視的な場所である負の遺産が、一時的に生起する仮設的で可視的なローカルな儀礼空間も併存させている点

8. おわりに

仏教儀礼、公的な慰霊祭、コミュニティや家族の慰霊などの事例を詳細に見ていくことで、負の出来事を「破棄したい」と「保存したい」という両義的な感情の発露の場を捉えることができる。高齢者は、場所が示唆することを直接的な体験として知っている。農村の子どもは、“ここ(Tini)”や“あそこ(Tinou)”で何があったのか、場所がどういう意味をもっているのかを、親や大人からの伝聞により伝えられている。しかし、その場所で何があったかを語る明示的な表象は存在しない。負の遺産と出来事は、住民同士の口伝と宗教行事の中で受け継がれている。

ローカルな慰霊の空間の扱い方には、現在のカンボジアの人間関係の原型を見ることができよう。カンボジアの自己と他者との関係性は、ローカルな慰霊の場で培われた両義的な感情を内面化したことで、「時間、場所、目的によって変化する新たな人間関係」をつくる起点となっている。信頼関係を築きにくい者同士が関係をつなげる寛容性を、慰霊の空間は長期の時間をかけて滋養してきたといえる。

参考文献

- 天川直子編(2002)『カンボジアの復興・開発』、研究双、No.518、日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究。
- 上田広美・岡田知子編著(2012)『カンボジアを知るための62章』、明石書店。
- 馬場紀寿(2008)『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴサへ』、春秋社。

牧野冬生 (2015) プノンペン の 成 立 と 他 者 性
— 都 市 生 活 の 背 後 に あ る 空 間 構 築 史
一、駒沢女子大学研究紀要、No.22、
pp.205-220.

牧野冬生 (2011) “非正規労働移民の統計的
把握に向けた試論—カンボジアを事例
に参与観察を援用した統計調査プロセ
スの提案—”、アジア太平洋討究、
No.17、pp.149-168.

J. デルヴェール (2002) 『カンボジアの農民
—自然・社会・文化』、風響社。

Alexandra Kent (2006) “Reconfiguring
Security: Buddhism and Moral
Legitimacy in Cambodia” , Security
Dialogue, Vol 37, Issue 3, The Peace
Research Institute Oslo.

Ian Charles Harris (2008) Cambodian
Buddhism: History and Practice,
University of Hawaii Press.

John Amos Marston (2004) Elizabeth
Guthrie History, Buddhism, and New
Religious Movements in Cambodia,
University of Hawaii Press.

Michel Igout (1993) Phnom Penh Then and
Now, White Lotus.

vimeo.com/user13343481)

⁴ “Bringing the Khmer Rouge to Justice” ,
Case Study (ies) :Cambodian Genocide,
Human Rights Review, 1, 3, April-June 2000,
pp. 92-108

⁵ ナーガは元々インド神話に登場する王であ
るが、釈迦を保護したとして後にカンボジア
の仏教に取り入れられた。

¹ カンボジア仏教の在家信者であり、仏教儀
礼を取り仕切り僧侶を補佐する役目を担う。

² カンボジア仏教における女性修行者であり、
仏教儀礼において僧侶やアチャーを補佐する
役目を担う。

³ クメール・ルージュの虐殺に関しては、欧
米の大学によって、多くの調査が実施されて
きた。特に、イエール大学・カンボジア人
大量虐殺プロジェクトは、大規模な調査プロ
ジェクトである。(Yale University's
Cambodian Genocide Program: <https://>